

渡辺和敏 監修

豊橋市浄慈院日別雑記

自文化十年  
至天保十四年

愛知大学総合郷土研究所 編

あるむ

## 凡例

- 一、本書は『豊橋市浄慈院日別雑記』として、多聞山浄慈院所蔵の「浄慈院日別雑記」のうち、文化十年（一八一三）より天保十四年（一八四三）の分を取めた。「浄慈院日別雑記」の伝来・性格については解題・解説で述べた通りであり、「浄慈院日別雑記」のほか、「多聞山日別雑記」や「山澄日別雑記」等とする表記もある。
- 一、『豊橋市浄慈院日別雑記』は、主に浄慈院住職による文化十年（一八一三）より明治十九年（一八八六）までの日記であり、原則的に一年分が一冊からなる。
- 一、収載の（天保六年カ）は、内容的にみて浄慈院外での日記で、しかも天保六年のものという確証も得られていないが、浄慈院伝来のもので同寺院関係者による日記であるのでそのまま収録した。
- 一、日付の前に、○・●・◎等の天気図の記号を付したものもあるが、本書への翻刻に当たっては省略した。
- 一、本文の上部に頭注がしてあるものもあるが、内容が重複している場合にはこの頭注を省略した。
- 一、日記中には、内容の変わり目に○・一・「」を記してあったり、空欄でそれを示したりしてあるが、翻刻に当たっては全てを○で統一した。
- 一、翻刻に当たっては、字体は原則として常用漢字のあるものはこれを使用し、固有名詞等には旧字を残したものもある。変体仮名は江・而を除き平仮名とすることを原則としたが、合字のメはそのまま残し、夕は平仮名で「より」とした。
- 一、本文には読みやすくするために、適宜読点および並列点を付した。
- 一、誤字・脱字や意味不明の箇所には、適宜その傍らに（ ）を付して正しい字を示したり、（脱カ）（ママ）等の

注記を付したりした。

一、原文の抹消部分は削除することを原則としたが、残したほうが適当と思われる箇所は〃〃〃を付してこれを示した。

一、虫くいや破損で判読不能の文字は□□をもつて示した。□の数は大体の不明文字数を示している。

一、表紙の文字は「」内に記し、傍らに（表紙）と注記した。

一、表紙裏や裏表紙裏にメモのあるものがあるが、内容を判断して削除したり、「」内にその文字を記して（表紙裏）等と注記したりしたものがある。

一、後筆は「」を付してその旨を傍注した。

# 目次

凡例

解題

〔地図〕

文化十年 浄慈院日別雜記知事……………

三

文化十四年 浄慈院日別雜記……………

九

文政二年 浄慈院日別雜記……………

六〇

文政十一年 浄慈院日別雜記……………

一〇五

文政十二年 浄慈院日別雜記……………

一六四

天保二年 浄慈院日別万記……………

二三二

(天保三年)……………

二九三

x v i

(天保六年カ) ..... 三五三

天保八年 浄慈院日別雜記 ..... 三五六

天保十年 浄慈院日別雜記 ..... 四二四

(天保十二年) ..... 四八二

天保十四年 浄慈院日別雜記 ..... 五三九

解説

五九一

## 解題

本書所収の「浄慈院日別雜記」は、江戸時代の三河国渥美郡羽田（はだ）村、現在の豊橋市花田町に所在する多聞山浄慈院という寺院の住職（時にその弟子）が記録した文化十年（二八一三）以降の日記である。表紙に記された日記名は「多聞山日別雜記」・「浄慈院日別雜記」・「山澄日別雜記」等々で、必ずしも全冊が統一されているわけではないが、以下では原則的に「豊橋市浄慈院日別雜記」と呼ぶ。

江戸時代の羽田村は、城下町の吉田と北東で接し、牟呂村と南西で接していた。吉田は城下町であると同時に東海道の宿場でもあり、豊川（吉田川）舟運や信州・別所街道で奥三河や信濃国方面と通じ、伊勢国川崎との通船や三河・伊勢湾から外洋へ出る廻船の湊の所在地でもあった。牟呂村は三河湾に面した大規模な集落で、近年では「ええじゃないか」騒動の発生地として注目されている。

江戸時代の羽田村は、若干変則的な村である。と言うのも、幕府の郷帳には羽田という村名はなく、吉田方村のなかに含まれていた。吉田方村は、慶長九年（一六〇四）の検地で二、七三一石余もあった大規模な村である。元禄十四年（一七〇一）の郷帳では二、〇五八石余とある。吉田方村の地名は、城下町吉田の南西方面に広がっている地域であったので、そう呼ばれたのであろう。

吉田藩では、この吉田方村を吉田方五か村とも称していた。吉田方五か村とは、羽田・野田・三ツ相・吉川・馬見塚の五か村である。これらの五集落は、それぞれ実質的には独立した村であり、吉田藩よりそれぞれ個別に年貢割付状を受けていた。

羽田村単独の村高は、明治二年（一八六九）の高辻帳に九八二石一斗二合とあり、吉田方五か村では最大である。安政五年（一八五八）の家数は一三五軒、人口六三四人であった（『豊橋市史』第二巻）。

羽田村は明治十一年（一八七八）に花ヶ崎村と合併して花田村となり、同二十一年には地内に豊橋駅が開業した。明治三十九年に豊橋町・豊岡村と合併して市制を施行し、豊橋市花田町となって現在に至っている。豊橋は、江戸時代の吉田を明治二年に改称したもので、明治二十二年から町制を施行していた。

この羽田村（花田村）に所在する多聞山浄慈院は、現在では浄土宗西山禅林寺派に属するが、明治以前には真言宗・天台宗・律宗・浄土宗の四宗兼学の檀家をもたない寺院であった。浄慈院の詳細については巻末の「解説」に記してあるが、いづれにしても檀家がなく、朱印地・除地もないのに、常に住職とその弟子が二〜三人いて、このほかに二〜三人の下男をも抱え、さらに城下町吉田の中世古というところに観音堂（後に観音院と改名）という末寺を有した寺院であった。

こうした江戸時代における浄慈院の存立の経済的基盤は、同寺院によるさまざまな宗教的・世俗的活動にあった。その活動内容は一般的な寺院としての諸行事のほかに、周辺地域の人々を対象とした加持祈祷が大きな収入源であり、祠堂金貸付でも大きな金額で運用していた。また無年貢地は有していないが、地主的な農業経営を行って下男を抱え、さらに繁忙期には近在の人々を日雇いとして雇っていた。同時に、寺子屋を開いて近在の子供を預かっていた。

現在、多聞山浄慈院では江戸時代中期以降の古文書・記録類を若干所蔵しているが、そのなかでは内容的にみて『豊橋市浄慈院日別雑記』が最も特徴的であり注目される。全四三冊と若干の断簡として残っている『豊橋市浄慈院日別雑記』は、年代的に最も古いものは文化十年（一八一三）であるが、同年は十二月分が残るのみである。最

も新しいものは明治十九年（一八八六）のものである。

すなわち『豊橋市浄慈院日別雑記』は、おそらく文化十年から書き始め、第七世住職の普門覚圓（？）一八五九）・八世慈明覚禪（一八一八〜一八八七）・九世山澄貫道（一八六八〜一九〇六）の三代の住職によって七四年間書き継がれ、明治十九年でその記述を止めたとみられるが、現存するものはその約半分であり、残りは紛失したようである。住職が外出などで不在の時には弟子が日記を書き継いでいる場合もあり、同じように住職が老齢になると弟子が代筆するようになる。このことは、この日記を書き継ぐことが、浄慈院において特別に重要な意味を有していたことを示唆している。

すなわち『豊橋市浄慈院日別雑記』は、一般的な日記としての意味以外に、その書かれた内容から農事日誌としての役割、祈祷の内容とそれに対する布施・礼金、金銭出入の記録などとしての役割があつたと推測される。これらの農事・祈祷・金銭出入は、年々・日々繰り返されているので、後々の参考にする必要があつたと考えられるのである。あるいは村内・近在住民からは、日々おきているさまざまな出来事についての記録を要望されていたので、こうした日記を書き継いだのかも知れない。

約半分を紛失した時期については明確ではないが、第十世住職山住脩仁によって終戦後間もない時期にこの『豊橋市浄慈院日別雑記』の主要部分が大学ノートに書き抜かれており、書き抜かれたその部分は現存の『豊橋市浄慈院日別雑記』のものに限定されている。したがって約六〇年前には、すでに約半分が紛失していたわけである。

ただし『豊橋市浄慈院日別雑記』のうちの数冊については、脩仁が書き抜き作業を行う前に別の場所に保管されていたようで、それについては書き抜き作業から除外されている。そしてその数冊は、つい最近になって新たに発見されたものである。こうした経緯があるので、今後に紛失中のものが見付かる可能性も残っている。

『豊橋市浄慈院日別雜記』の大きさは、縦が約二八センチメートル、横が約一六センチメートル、半紙を二つ折りにしたいいわゆる縦冊である。料紙は、一般的に質が比較的劣り、なかには浄慈院へ寄せられた布施・礼金を包んだ用紙とか、同寺院で行っていた祈祷の際のメモ用紙を裏返しにして再利用したものもある。保存状態は、あまり良好とは言えず、虫食いが甚だしいものが多く、なかには綴じた紙縫が切れて中身が錯乱しているものもある。前記の若干の断簡とは、この錯乱で復元が不可能な部分のことである。

記述方法は、まず日付の次に天候を記しているが、天候については○・●・◎というような記号で示し、特記するような天候だけを文字にしたものもある。これらの天候の様子を示す記号はなかなか捨てがたいものがあるが、本書への翻刻に当たってはこれらの記号については省略した。天候の次に本文が記してある。

本文の記述内容は、前述したような浄慈院の諸活動、すなわち寺院としての諸行事のほかに加持祈祷の内容やそれによる入金額、農作業の内容や日雇い状況と日雇い賃、寺子屋としての業務やそれに対する祝儀の内容、住職・弟子・下男の日常生活、その日常生活を支える諸買物品とその物価等々で、年末には小作地の年貢や祠堂金貸付に関する記述も頻出する。

こうした日常的・年中行事的なことに加え、さまざまな非日常的な出来事や風聞についても記してある。それは浄慈院や同寺院の所在する羽田村内だけのことに止まらず、羽田村が吉田に隣接していたことから吉田の町域でのことや東海道筋のこと、あるいは吉田藩の藩主・藩士のことにも及んでいる。

出来事・事件や風聞を記述する場合には、原則的にその当事者名を記しているが、その名前の直前に居住する村名、あるいは字名を記するのが一般的である。例えば橋良権蔵とあれば、橋良村の権蔵のことである。ただし村名でなく、村のなかの字名や吉田の二四町の名を付してある場合もあるので注意する必要がある。例えば、羽田村の人

についてはそのなかの字名（嶋と呼んでいる）である北側・西羽田・百度（ずんど）・中郷の誰々となる。隣村の牟呂村についても同様で、市場・大西・坂津・外神（とがみ）・公文・東脇などの字名が付されていることが多い。本文の内容を理解する手掛かりのために、参考として羽田村と周辺村々の概略図を掲載しておく。

なおこの『豊橋市浄慈院日別雑記』では、原則的に日々の記述中で記述内容が一変する場合、それを示すために○とか一・―という印しを書いたり、あるいは一文字分を空けたりしているが、時にその表示が不明な場合もある。本書への翻刻に当たっては、これらの表示に注意しながら、その表示を○に統一した。

従来、この『豊橋市浄慈院日別雑記』については一部の識者にその存在が知られており、すでに『豊橋市史』第三卷（昭和五十年）でも部分的に利用されているが、その全容を知る人はほとんどいなかったと言ってよい。豊橋市の市街地は昭和二十年六月二十日午前〇時ごろからの空襲で大被害に遭い、古文書類もほとんど焼失してしまった。そうしたなかで、市街地から少し隔たった浄慈院は空襲から免れ、その日記である『豊橋市浄慈院日別雑記』もその約半分とは言え、残されたことは幸いなことであった。

豊橋市に所在する愛知大学の建学精神は「国際人の養成」と「地域文化への貢献」であり、その一方の趣旨を実践するために総合郷土研究所がある。当研究所では、以上のことがらを鑑みて『豊橋市浄慈院日別雑記』を翻刻して公刊することにした。

その編集には、浄慈院第十一世住職の山澄和彦師にも協力を仰ぎ、渡辺が代表者になって有蘭正一郎・橘敏夫・和田実・村長有子氏と共同で作業を行った。このほかに森田亮子・小早川道子・水谷令子氏にも原稿の整理で協力してもらった。

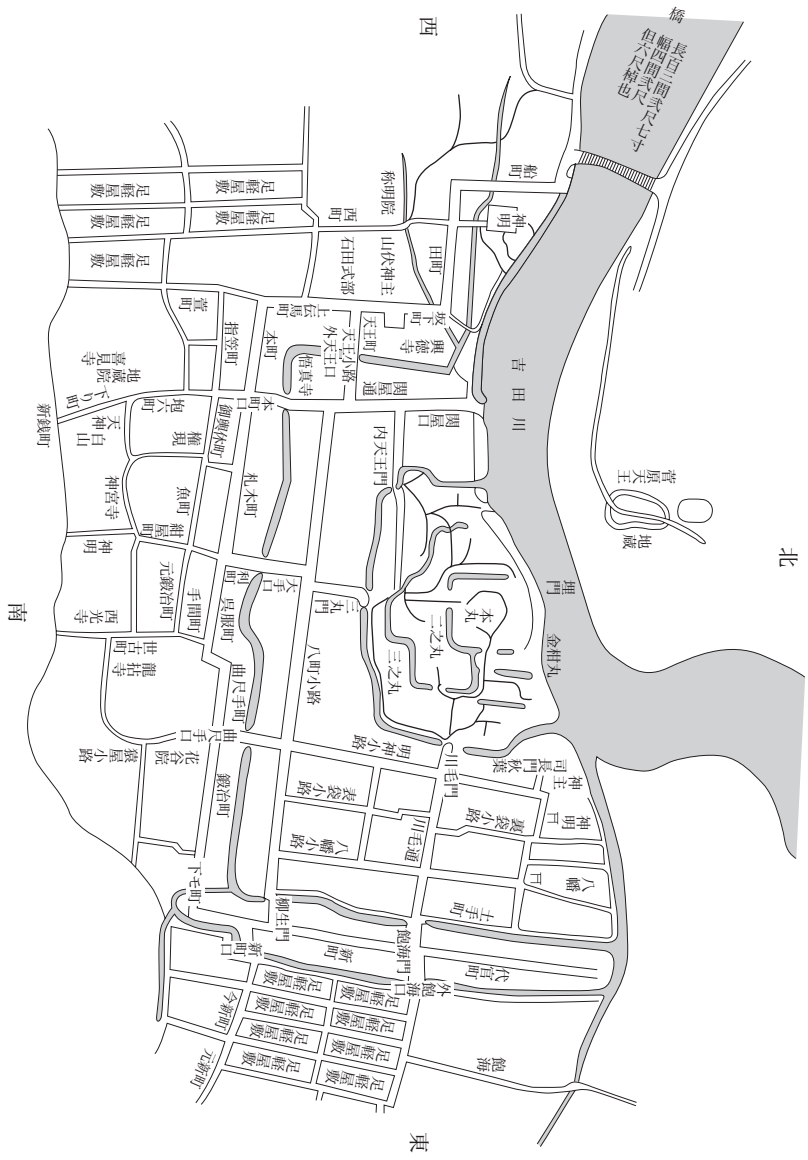
（渡辺和敏）



第1図 羽田・牟呂村近郷地図



第2図 本書に出てくる主な宿村名



第3図 吉田城下町図 文政10年写  
 (『豊橋市史』第2巻より)

豊橋市浄慈院日別雜記

自文化十年 至天保十四年

〔表紙〕  
〔後筆〕  
〔文化十年十二月〕

浄慈院日別雜記知事

十二月大

朔日 天氣、覺庭掃除、降井戸車細工、○齋後五助粟をつく、○剃髮致、○庄屋より国役夫金之割付持て来ル、○源六来ル、井戸車出来、○今日味噌玉ををろす、○隆、権右衛門へ風呂入二行、

二日 天氣、○味噌玉をはたく、齋後味噌を仕込、五助町へ塩を求二行、○理證、町へ紙をかい二行也、序二船町九郎左衛門へ櫛柑式十五遣ス、晩方隆百度へ行也、○九文字屋より注文之院金（印）今日着致由手紙を持て来ル、

三日 天氣、○隆、九文字屋へ院金を取二行也、尺式寸ト尺式寸五分ト式ツ来ル故尺式之方を持て帰ル、○齋後隆又尺式寸五分之方を取二行也、持て帰ル、直段（寸腕）は尺式寸はい・輪共二百式十匁、尺式五分之もはい・

輪共二百式十五匁、○半右衛門・平十・新兵衛・権右衛門呼二遣ス、直ニ来ル、音大分宜敷故尺式五之方を求はづニ而候、尺式之方はかへす、○寛、仏名之供物紙袋をこしらふ、

四日 天氣、○大分あたゝか、五助餅粟をつく、○隆、着物裏を造ル、○齋後隆、半右衛門殿へ国役歩金勘定二行也、○仙藏殿見ヘル、胡麻餅壺重持參ス、直ニ帰ル、智觀衣を洗ふ、隆ち（襦袢）ハンを洗ふ、

五日 天氣、○庄屋より国役歩金之過五十三文帰ル、○隆のりをする、○齋後皆人洗だく致、孫太郎二銭式百文にかし、長全寺入院ニ而半右衛門へ帰シ物持て寄ル、○百度長太郎より隆生之綿入并仏名之花松を持て来ル、○隆ちはん之袖木綿式尺式寸、知觀町へかい二行也、○晩方おろく餅米を洗ニ来ル、

六日 天氣、○作重来ル、○今日餅つき之支度致、おろく呼ニ遣ス、来ル、おろく餅之支度、隆餅之取粉をひく、子共大治郎・三十、花もらいニ遣ス、なるてん（南天）・梅少々持て帰ル、作重も花取行也、齋後餅をつく、

米□斗・粟三升之を八白ニつく、餅御飾計か、丸五百計也、七ツ過ニ仕舞、○村中ニ肝煎無故作重野田へ取ニ行也、用々(漸々)五六寸計之壺本持て帰ル、○御蔵番壺合壹錢を持て来ル、○伊奈伝助祈禱之頼ニ来ル、○晩方知観・平重・権右衛門・六郎兵衛・伝四郎殿へ例年之通り七ニ料理を頼ニ遣ス、隆夜分百度へ行也、

七日 天氣、○本堂莊嚴平重・権右衛門・六郎兵衛・伝四郎来ル、伝四郎・善六町へかい物ニ行也、平重・権右衛門小作年貢帳并祠堂帳仕立、孫太郎来ル、作重花立、○齋後(マツ)、○長全寺手伝持ニ来ル、皆人料理致、観音堂へ孫太郎使ニ行也、五助坂通寺へ遣ス、今年は断申来ル、知観村方へ呼使ニ行也、○風呂を致、○相模殿ニ而炭壺俵借用致、

八日 天氣、□□取持之衆皆人見へる、観音院来ル、○本堂莊嚴致、瓜郷忠左衛門五軒分齋米持て来ル、惣左衛門齋を振舞行、○関口園右衛門より齋米壺重并あげ拾式・青銅五疋来ル、使ニ茶漬を出ス、齋後振舞相(参詣)濟次第仏名開白致、○指参四五人、世話中帰ル、行灯

備方々へとぼす、五助町へ遣ス、あめ五十文求かはらけ四ツ求、孫太郎今晚夜宿ル、

九日 曇天、○作重来ル、本堂掃除、○半右衛門より胡麻餅壺重・白餅壺重施入、○齋之料理、平、あふらけ・大根・里芋・牛房・にんしん、酢敢等也、(和)観音院来ル、長全寺来ル、齋後法事初る、○瓜郷惣助より胡麻餅式重施入、○参詣十人計有、○法事、作重を町へ蠟燭・油求ニ遣ス、○長全寺帰ル、○清須松右衛門齋米を持て来ル、○重次郎より大なるあめを施入、孫太郎宿る、

十日 天氣、○孫太郎齋こしらひ、○辰五郎あけ七ツ施入致、今日手伝持、○齋後観音不来ル、法事初る、下五井伊右衛門・三郎左衛門・源六参詣各々之齋米壺升ツ、施入、法事後下五井之衆へ餅を焼て出ス、晩方観音来ル、○追法事初る、参詣外陣ニ壺(杯)盃有リ、○仏名会今晚ニ而結願、孫太郎宿る、

十一日 天氣、孫太郎帰ル、○覚・隆・知供物包、作重供物配ニ来ル、子共大治郎・三重村方朝間ニ終、○

理證齋ごしらひ、○齋後作重町方・城内へ供物配ニ遣ス、五助下五井・瓜郷へ遣ス、町より供物初尾拾貳銅十有り、○おろく来ル、洗上致、覚・隆本堂掃除、十二日 天気、○子共来ル、○覚・隆仏名勘定致、齋後佐平次、拙牛和尚之親元より拙牛和尚事尋ニ来ル故、返事之文言頼ニ来ル、齋後仏名勘定失方壹はいニ成り、併南鎌壱片紛失致ス、庄屋殿へ五助七ツ入こ帰へス、伝四郎より磬子奉加之錢□貫九百計持て来ル、此者半右衛門へ遣ス、○伊勢大神宮之御初尾五十文半右衛門へ遣ス、

十三日 天気、○五助粟をつく、○齋覚子共書始之手本を書く、○五助内へすゝはらいニ行也、○前側六兵衛疾路ニ来ル、理證殿帰ル支度、○紋六・乙松給銀を持来ル、おろく遣ス、はつニ候得共おろく留主ニ而先此方へ預り、○晩方五助を六兵衛へ鷹子為持遣ス、十四日 天気、大寒、理證出立、作重来ル、餅米をつく、○五助山かり、○塩式升求代三拾四文、北側清助弥陀如来開眼を頼ニ来ル、○齋後おろく呼ニ遣ス、乙

松給銀之事ニ付三分之所壹分ハ入用、跡<sup>(分)</sup>式歩は貸付ニ致由、壹歩ハ此方へ預り式歩ハ弥六ニ貸スはづニなる、

十五日 天気、○寒あきなり、○五助粟をつく、○弥六来ル、金式分取替貸ス、○齋後布薩致、百度清吉□□見ニ来ル、御符を遣ス、○隆町へ行也、九文字屋へ払致ス、金壹歩式朱ト八百四十七文也、○院金代外用也、茶袋紙貳帖・美濃紙壹帖代壹匁ツ、・半紙壹束ニ付壹匁七分づゝ也六束求、

十六日 天気、前側六兵衛内むすこ之祝ニ来ル、○五助粟をつく、○齋後隆・覚障子を張、○智観町行也、<sup>(珠)</sup>末香三升・菓子五拾文かを求、おろく粟たてニ来ル、○覚多聞供致、

十七日 天気、隆庭掃除、○齋後覚・隆茶紙袋を造ル、○百度兵太郎へ祈祷之札・供物を遣ス、○北側清右衛門先日之開眼之札ニ来ル、袋百貳拾余り出来、晩方源六そてつ之葉を取ニ来ル、禍金□□、

十八日 天気、○覚祈祷致、○齋後茶紙袋ごしらう、

○孫太郎日用勘定ニ来ル、○畠小作名前を書出し、此頃年貢ふらちニ付庄屋へ預、万取立帳之越書出して見せる、取立を此通ニト庄屋へ頼む、

十九日 天気、大寒し、○隆庄屋へ年貢通書ニ行也、齋前故預ケ帰ル、齋後五助かや町庄吉へ茶を聞ニ遣ス、茶金壹両ニ付三十三貫目替也、六貫目持て帰ル、六貫目ニ付拾匁九分壹厘也、又醬油之柄を買代貳百文也、

廿日 曇天、○百度清七加持之札ニ来ル、○齋後隆、蜜柑之下之田土をこなす、○伝四郎干菜を取ニ来ル、晩方雨降る、五助薪木を土蔵へ入る、

廿一日 天気、○覚・隆小作年貢帳改、○齋後伝四郎へ年貢直段を聞ニ遣ス、直廿四俵七分、此之事ハ今年之年貢帳ニ速ニ書付可有、○大師様へ香花供養御形供物致ス、

廿二日 天気、暖シ、○五助方々へ年貢さいそくニ遣ス、おろく来ル、○田之事植るばかりニして、貳反余てハ壹分余ニて致ス由申来ル、先達而預り置金子壹分

おろくへ渡、齋後皆剃髮致ス、おろくきびはたきニ来ル、隆庄屋年貢皆済ニ行、中郷吉右衛門より利足壹分来ル、受取を遣ス、庄屋当主平十へ寄て帰ル、年貢平十へ預ケる、○

廿三日 雨天、○弥六より子共病氣臨終加持頼ニ来、覚子共を連テ行也、○齋後智観町へ楠葉行状持て行、そうり壹束、沙唐(砂糖)五拾文か□求、五助坂津小作を呼遣ス、○晩方百度へ行也、作十二手間金分遣ス、

廿四日 天気、○おろく餅米・粟を洗ニ来ル、○百度次郎八よりぞうり貳束施入、齋後北側惣右衛門年貢事ニ付来ル、○伝四郎より利足貳分内入レニ持て来ル、此利足半右衛門へ渡、○かや町善太郎より年貢米壹斗四升之代貳朱ト貳百五拾貳文伝四郎へ誂て来ル、西組戸平しゃく病氣之祈祷を頼ニ来ル、護摩を頼来レトモ取込候故祈祷ニ致ス、百度源七母壹合壹銭を持て来ル、より綿つもぬき三ツ施入、○子共今日より休、廿五日 天気、○餅つき孫太郎・彦作・おろく来ル、平重・権右衛門併て呼、餅米貳斗五升計つき粟あらニ

而四斗つく、本尊鏡餅上下二而三升取、地藏尊上下二而式升取、本堂両尊上下二而壹升取、本堂其外所々見合也、都合拾三膳也、齋後前芝仙蔵来ル、南鏡壹片志ス、くす湯致、味噌壹重施入、追付帰ル、○七ツ過ぎニ餅仕舞、風呂致ス、権平へ餅壹重遣ス、○晩方智観町へ遣ス、明日西組戸平之護摩買物二行、

廿六日 天氣、早朝護摩支度致、齋後寛護摩ニかゝる、龍生町へ歳暮買物二行也、○西組戸平護摩之御礼ニ来ル、金佰疋・青銅百文・御符拾式也持參ス、源六いかきや何かを借り来ル、晩方北側茂平次より歳暮豆ふ式丁来ル、

廿七日 天氣、○五助船町八三郎へかき・こんぶ・かや等取ニ遣ス、権右衛門より歳末山之芋三ツ来ル、齋後五助方々へ歳暮を持たせ遣ス、相模へ歳暮柿半重外ニ米壹升初米ニ遣ス、○寛・知年玉之こんぶを包、百度周歳歳暮ニ来ル、紙壹帖遣ス、○寛多聞供致、○おろく歳暮あげ九ツ来ル、○西宿弥三郎磐子之志を持て来ル、又右衛門式百文、弥三郎百文外ニ西宿志式百文

也、○晩方北側善六より歳暮芋式升来ル、○今晚孫太郎来ル、殿様年貢不足ニ付無心ニ来ル、米壹俵備て遣ス、百銅年々歳末ニ遣ス、

廿八日 天氣、○平重殿より豆ぶ式丁歳暮ニ来ル、○孫太郎来ル、権右衛門へ米取二行也、持て帰り計て見る、三斗九升式合一勺也、○庄屋より年貢通帳并二年貢過米錢ニ而五百九文・大豆代百四拾式文、×六百五拾壹文来ル、○瓦屋平次郎掛取ニ来ル、壹匁四分何厘錢ニ而百六拾七文遣ス、齋後、○寛庭掃除致、中郷代歳暮ニ来ル、源六より歳暮来ル、山芋壹つと也、○大村林藤右衛門より歳末山芋壹つと、藤八郎より里芋壹つと来ル、使ニ式拾文遣ス、○伊奈伝助多聞供之礼ニ来ル、鳥目式拾疋持參ス、外ニ三拾疋ハ来正月三箇日多聞供を頼行、○今晚茶をつめる、寛・隆・智・五助ニ而七拾余りつめる、孫太郎門松を持て来ル、廿九日 天氣、大寒、相模より歳末そは粉二袋来ル、○下地白木屋又吉掛を取来ル、壹匁四分代百六拾文払、○齋後寛方々掃除致、おろく洗物ニ来ル、龍町へ

行也、五種香百文・土ひん沓ツ・せん香三わ・知観之  
そうり沓速(マツ)、龍そうり・下駄沓速求、にんじん三十計  
小太郎へ誂、○城清四郎より歳末山芋来ル、八十八祝  
義百文、○九右衛門より歳暮豆ふ忒丁来ル、佐治郎よ  
り里芋・そうり忒速来ル、観音堂歳末糍味噌沓重来  
ル、源六金沓分か錢を替て遣ス、沓分ニ沓貫七百忒拾  
文也、晩方佐平新田源兵衛之内ニ狐か付祈禱を頼ニ来  
ル、随求守・御符を遣ス、○新兵衛より歳末里芋来  
ル、○今晚とうふこうらかす、○かや町庄吉より茶之  
代取ニ来ル、沓貫忒百文遣、養蔵・佐次郎・重吉歳末  
ニ来ル、吉川次郎右衛門より御鏡餅沓ツ・足袋沓束来  
ル、

晦日 天氣、○百度助四郎・玄次郎歳末ニ来ル、三十  
次郎・岩治より来ル、作重より歳暮里芋来ル、○斧蔵  
歳末ニ来ル、忠八より豆ふ忒丁来ル、六右衛門より歳  
暮豆ふ忒丁来ル、○百度善四郎より年貢米三斗代沓分  
忒朱ト四拾忒文来ル、○おろく大根・蕪・牛房洗ニ来  
ル、味噌沓重遣ス、○斎後孫太郎門松立ニ来ル、豆ふ

三丁かして遣ス、北側源蔵より歳末豆ふ忒丁来ル、五  
助かや町へ年貢早速(さい)ニ遣ス、こんにやく十・酢四合  
求、○寛布薩致、次ニ剃髮致、○風呂を致、百度源右  
衛門より歳末牛房沓わ・菜来ル、長太郎より唐之芋三  
ツ来ル、

(裏表紙)  
「晦日時分 ㊦㊦」

自文化十年十二月朔日」